

戦時下の雄弁
—マッキントッシュの『国王殺し政府との
講和書簡』（バーク著）評—

荻谷 千尋

The Eloquence in Wartime: Mackintosh
on Burke's *Letters on a Regicide Peace*

Chihiro KARIYA

Abstract

This paper explores the political context of eloquence in Britain during the French Revolutionary Wars, by examining the controversy on peace with France. Burke's enigmatic political pamphlet *Letters on a Regicide Peace*, published for continuing the war in 1796, is one of the most difficult works to interpret. The pamphlet which interweaves threads of rich rhetoric and antagonism toward France has kept scholarship away for a long time. Some scholars have found in the text international theory, and a newly invented word, diplomacy, emphasizing his talent, originality, and innovation. But since they have not paid attention to the reaction from his contemporary, his intention, and the context, the interpretations may be anachronistic. This essay reads the pamphlet in the contemporary controversy, especially with James Mackintosh, who published *Vindiciae Gallicae* in 1791. His review on *Letters on a Regicide Peace*, which appeared in *Monthly Review* in 1796 and refuted Burke's opinion, has been rarely considered. This paper argues that Mackintosh adapted the alternative strategy focusing on Burke's eloquence or rhetoric, rule of law, and opinions, which were not any subject to Burke. First, after introducing the period background and brief overview of *Letters on a Regicide Peace*, it shows that Mackintosh warned Burkes' eloquence by referring to the canonical speeches by Demosthenes and Cicero, and by putting his pamphlet in the context of literature such as *The Life of Henry the Fifth* (William Shakespeare) and *Paradise Regained* (John Milton). Second, it focuses on disagreement on the idea of opinions between them. He looked Burke's perilous gift for eloquence, which incited people to the war

persuasively, and called for anti-war.

1. 問題の所在

1796年10月20日、エドモンド・バーク（Edmund Burke, 1730-1797）は、ピット内閣が進めるフランス総裁政府との和平交渉に反対し、戦争継続を訴えて『国王殺しの総裁政府との講和書簡 第一・二信』（以下、『講和書簡 第一・二信』）を公刊した¹。『講和書簡』は『フランス革命の省察』（1790年、以下『省察』）以後にバークが書いた政治パンフレットとしては、もっとも包括的であり分量をもつ著作である。1794年に庶民院議員を辞したバークにとって、出版は自らの政治的意見を公的に伝える唯一の手段だった。

『省察』が、同時代的論争の機軸の一つとなり、また、20世紀には保守主義の「正典」に位置づけられ、今日のバーク像やその評価を決定的なものとしたのに対して（Jones 2017; 犬塚 2017）、『講和書簡 第一・二信』に対する関心は、研究史を含め、それほど高くない。『省察』の狙いが、国外思想の流入による国内秩序の動揺に対処することにあったのに対して、『講和書簡』は国家間関係の在り方そのものを問うた。この著作の性格の相違は重要である。研究史は、国民国家やそれにかかわる概念や論点の分析に傾倒し、少なくとも20世紀中葉までは、対外的、国際的な問題領域は周辺のだった。とりわけ思想史学は、前者の課題に応答してきたものの、ごく最近まで、国家間関係や国際秩序構想への関心は希薄だった²。

バーク研究史においては、Stanlis (1953) が、諸国民の法とヨーロッパ共同体（Commonwealth of Europe）を分析するなかで、『講和書簡』の重要性にいち早く注目した。国際政治学においては、「国際社会」の系譜を探究する Wight (1966) が、『講和書簡』に書かれた、条約への過信を諫め、文化やマナーズの同質性の重要性を説く一節を、その国際社会論の一つに組み込んだ³。この視点は、国際政治学の領域を超えて、今日『講和書簡』を読解する一つの枠組みとなっている⁴。この他、『講和書簡』は、diplomacy（外交）という語彙の初出を示す文献として参照されてきた（Nicolson 1988: 28-29=20）⁵。

これらの研究は、概して、『講和書簡』の先見性や独自性、あるいは理論的貢献を強調する傾向にあり、同時代人の反応については関心が希薄である。『講和書簡』が政治パンフレットである以上、同時代、とくにバークと見解を異にする政府やそれを支持する国会議員や人々の反応を軽視できない。バークは彼らに向けて書いたからである。彼らをどう説得するのか、そのために利用可能な言語は何か意識されていたと推定されるべきである。すなわち、異論との交流によって政治的な言論空間は成り立つのだから、同時代の論争史というレンズを通して『講和書簡』を読解することが必要となる。

異論を呈した者の一人にジェイムズ・マッキントッシュ（James Mackintosh, 1765-1832）がいる。彼はスコットランド啓蒙思想を背景にもつ思想家、政治家であり、他に先んじて『省察』を「反革命のマニフェスト」と見做して、それに反論した『フランス擁護』（*Vindiciae*

Gallicæ, 1791 年) によって名を馳せた⁶。マッキントッシュは『講和書簡』への書評を『マンスリー・レビュー』(*Monthly Review*) に掲載し、ここでもパークの主張に反対した。だが、この批評は扇動的な紋切り型の反論ではない。現代の研究水準をもっともよく示す伝記のひとつは、マッキントッシュの批評を「合理的な反論」であり「よく考え抜いた節度」が保たれた、「文明的な不同意 (civilized disagreement) モデルの一つ」と評価している (Lock 2006: 560)⁷。マッキントッシュ自身が述べた「謙虚さを保ちながらも自由に意見を述べるのが、我々の義務」(Mackintosh 1796: 321) という自戒は、本書評に一貫して見られる態度である。この敬意をもって異論を呈すという態度が「文明的な不同意」を可能にしたのだろう。

本稿は、マッキントッシュが『講和書簡』をどう読んだかを明らかにすることで、同時代の論争、すなわち、書き手の言語や意図が読み手にどのように伝わったのか、またその言語的なコンテクストを明らかにするものである。マッキントッシュは、本稿の見解によれば、雄弁、法の支配、世論、国家間関係の4つの論点を提起しており——パーク自身が提起した主題といえるのは、国家間関係のみである——、このうち、雄弁がもつ力とその危険性は、本書評の隠れた主題である。また、法の支配、世論については、雄弁と関連づけて理解することができる。したがって、本稿の主たる課題は、マッキントッシュが戦時下における雄弁をどのように理解したかを解明することにある⁸。

2. 『講和書簡』の背景と概要

2.1. 背景

パークが『講和書簡』を執筆した契機は、出版の前年にあたる1795年10月29日（議会開会の前日）に、駐オランダ大使オークランド (William Eden Auckland, 1745-1814) が出版した『1795年10月の第4週の戦況についての所感』(*Some Remarks on the Apparent Circumstances of the War in the Fourth Week of October*、以下『戦況』) だった。

フランスの政治状況は依然、流動的だった。前年の1794年7月のクーデターによって、テルミドル派主導のもと、一七九五年憲法（共和暦3年憲法）が制定され、1795年10月31日に総裁政府が選出、11月3日に活動が開始されることになっていた。対外関係について言えば、テルミドル派公会は、「暴君からの解放」や「革命の輸出」を掲げ、戦線を拡大したジロンド派とは異なり、積極的な戦争、和平のいずれもおこなわなかったものの、フランスに有利な戦況が続いていた。その理由の一端は、対仏同盟が十分に機能しないことにあった。1795年にプロイセンがフランス共和国を承認し（4月5日）、これにスペインが続いて（7月22日）、対仏同盟が切り崩された結果、残る大国はブリテンとオーストリアだけとなった。各国は自国の利益を追求し「反革命十字軍」を求めることはなかったのである（山崎 2018: 241-243; 258-259）。

オークランドの見立てでは、「フランスには、現在、これまで慣れ親しんできた平和と友好関係を維持できる政府」があり、「現フランスの指導者らは講和条約を結ぶことに意欲的」

(Auckland 1795: § 24) だった⁹。「情念と憤りの感覚が、時間の経過とともに低下することは、本性であり運命」であって、今まさに漏れ始めた「両陣営ともに平和を求めるため息」、すなわち、この好機を逃すべきではないと説く。さらに「和平を実現するための調整の難しさは、かつての戦争時とはまったく異なっている」(ibid., § 39) とも述べて、和平交渉の妥当性を訴えた。彼が懸念しているのは、和平を妨げうる二つの国内勢力の存在である。

我々は、この戦争の必要性を無視して最初から戦争を非難してきた人々が、達成可能な条件や帰結を考慮せず、直ちに和平を要求する類いの、無分別な熱狂を和らげなければならない。他方で、フランス君主政の復古が不可欠であると考える人々が採用する教義によって、先を急いではない (ibid.)。

ここでは両陣営から突き付けられるであろう、結論ありきの、対立する二つの世論が提示されている。政府はこの二つの世論から距離を置き、外交交渉を行なうべきだと言うのである。この政治パンフレットが、世論を念頭に置いて執筆されていることは明らかで、このことは、外交が、事実上、君主や議会の専権事項ではなく、彼らだけで決められるものではなくなっていることを意味する。世論を形成することが、政府の外交交渉を有利に進める条件となるのである。ピット首相の協議と同意のもとに進められたオークランド提案は、12月に上下両院そして国民からの支持を得て、政府は翌1796年3月8日から和平交渉に入った¹⁰。だが、同月26日にフランスから和平交渉を拒否され、交渉は頓挫していた。バークはこの状況を、樂觀も座視もすることなく『講和書簡』を執筆し続けた。

バークは、和平交渉の推移とともに、オークランドの『戦況』批判を主とする「フィッツウィリアム卿への手紙」の執筆を止め、和平交渉そのものを批判するよう戦術を変えた。こうして執筆されたのが、『講和書簡 第一・二信』である。本政治パンフレットは1796年3月までに完成していたが、出版者であるジョン・オーウェンとの行き違いがあり、同年10月まで刊行が遅れた¹¹。Lock (2006) によれば、『講和書簡 第一・二信』は出版から3週間で1万2千部を売り上げたものの、同時期にバークが出版した、回顧的著作『ある貴族への手紙』(1796年2月24日)の売り上げの半分に止まった (Lock 2006: 559-560)。しかし『省察』の出版後2ヶ月の印刷部数が1万7千5百部 (ibid., 332)、バーク生存中の部数が3万部と言われていることを考慮すると『講和書簡 第一・二信』の部数は決して少なくない。本パンフレットをめぐる言説空間は、『省察』と同様に存在したのであり、その代表的な参入者がマッキントッシュだった¹²。

2.2. 概要

『講和書簡 第一・二信』の主題は明白である。総裁政府の性質は、国王を殺したジャコバン政権と同様でありゆえに妥協の余地はないこと、現在なされている戦争は、ブリテンのみならず、ヨーロッパ文明の存亡を賭けた戦争であること、和平は革命的な価値観への降伏を意味す

ること、そしてそれゆえに、和平は結ぶべきでないこと、また、同盟諸国は各国の個別利益を克服し、共通の理念のもと対仏同盟を更新すべきことが書かれている。だが、そのテキストの構造は複雑であり、またその言語は修辞や例示に富み、要約することは簡単ではない。

ここでは、マッキントッシュが読者のために提示した概要を紹介することで、本パンフレットの概略を示したい。マッキントッシュは、『講和書簡 第一・二信』への書評を、非国教徒が経営するリベラル系の雑誌『マンズリー・レビュー』に、二号にわたって連載し（1796年11月・12月号）、フランスとの戦争は不当で不必要だとパークの主張に反論した。本書評は当時の一般的な慣行に従って匿名で掲載されているが、マッキントッシュがパークに宛てた書簡によって、本書評の執筆者がマッキントッシュによるものであることがはっきりしている（22 December, 1796, *Corr*, IX: 192-193）¹³。マッキントッシュによる『第一信』の概要は次の通りである。

著者〔パーク。[]は引用者注を示す。以下同様〕は、本書の1ページから24ページ〔W&S, IX: 187-200〕において、戦争と和平に関するブリテンの気質についておおまかな所感を提示している。24ページから61ページ〔ibid., 200-221〕において、彼は、ブリテンとフランス共和国のあいだですでに為された交渉、ないし交渉に向けた予備的取り決めについて考察している。61ページから89ページ〔ibid., 221-236〕は、主として、大同盟形成に関して、ウィリアム王〔ウィリアム3世〕の政策と現在の状況を比較することに費やされている。89ページから112ページ〔ibid., 236-249〕まで、パーク氏は、ヨーロッパ諸国の宗教、統治、法律、マナーズの安全性や存在さえもが、フランスの制度と相いれないことを証明することに専念している。112ページから129ページ〔ibid., 249-263〕における彼の目的は、すべての国家は自国の平穏と安全保障を脅かす体制を破壊するために、戦争をおこなう権利だけでなく、その義務を負うという主張を立証することにある。129ページから、『第一信』の結びである138ページ〔ibid., 263-264〕におけるもっとも重要な問題は、続刊の一連の書簡の主題となるであろう諸問題を提示することにある（Mackintosh 1796: 310）。

続いて『第二信』は次のように整理される。

139ページから156ページ〔W&S, IX: 264-273〕まで、パーク氏は、この戦争の目的と当初の原理について述べ、連合国の行動を一様に特徴づけてきた原理——この原理は疑いなく、現在のヨーロッパを苦しめている惨事の大きな原因の一つである——からの不名誉な逸脱について、自由と活動力に加えて正義感をもって、非難している。156ページから188ページ（結論）〔ibid., 273-296〕にわたって、彼の努力は、フランスの君主政を転覆させた革命のもっとも強力な源泉の一つに、征服の精神と軍事共和国——フランスの強大化にもっとも適した統治形態——があるという考えを証明することに向けられている（Mackintosh 1796: 310）。

この概要に続き、マッキントッシュは、本稿の分析によれば、4つの論点を提示し、その分析に必要な抜粋を8つ紹介し、それぞれについて批評するというスタイルを取っている。論点は、順に、雄弁とその危険、法の支配、世論、国家間関係である。本稿は、冒頭で述べたように、このうち、雄弁と法の支配、世論について論じる。紙数の比率が著者の関心を反映しているかについては留意を要するが、本書評の4割は雄弁に割かれ、法の支配、世論を合わせると、7割近くを占める。マッキントッシュは、バークが提示する主題——戦争と和平——とは異なる事柄に議論を集中させていることになる。彼の意図はどこにあるのだろうか。

3. マッキントッシュの応答1：雄弁

11月掲載分の書評のほとんどを費やして論じられているテーマは、バークが主題とする戦争と和平ではなく、雄弁についてである。本節は、マッキントッシュがどのようにバークの雄弁を論評しているのか、またなぜ雄弁について論じる必要があったのかを考察する。

3.1. 雄弁とその危険

本書評は、冒頭で『講和書簡 第一・第二信』の海賊版（オーウェン版）問題を取り上げて著作権について若干言及しているが、実質的な議論は、バークの雄弁さを称えるところから始まる。だがこの敬意は、無条件のものではない。雄弁のもつ力を適切に行使することを求める、忠告付きの敬意である。マッキントッシュの要約によれば、フランス革命以降、6年間にわたって、バークが「他の誰も及ばないほどの理性と雄弁」をもって説得にあたってきたことは、「もっとも恐ろしい無政府状態から逃れる唯一の避難所は、執念深く手に負えない敵を破壊するための戦争」の開始とその継続である（Mackintosh 1796: 307）。この説得の帰結や妥当性をただしく判断できるのは歴史だけであると断りながらも、雄弁の才をもつ者はヘンリー5世がその助言者に与えた忠告について考えるべきだという。

卿〔大司教〕が余を説得しようとするれば

多くの健康な者が血を流すことになるだろう

だから、余を扇動（incite）する前に、どうかよく考えよ

シェークスピア『ヘンリー5世』第一幕 第二場

この引用の含意は明白である。雄弁の才をもつ者の説得は、聴衆の意思を自由に操作する。「血」と「扇動」という語彙が想起させるのは戦争である。つまりバークの雄弁に聴衆は容易く操作され、戦争へと駆り立てられてしまう、だからその才の使用の是非を自覚せよというのである。

マッキントッシュは、ときに戦争に訴えることが必要であり、そのために雄弁が必要なことを認めている。彼によれば、デモステネスは「同胞の臆病さと腐敗と戦い、ギリシアの自由を強く支持するために、その気でなかった彼らを奮い立たせ」、キケロは「ローマの自由が瀕死

の状態にあるなか」「暴君となった惨めな者との恥ずべき交渉を避けるべく」雄弁を発揮した (ibid., 308)¹⁴。デモステネスの著名な「ピリッポス弾劾演説」は、大国化するマケドニアを前に、ギリシアの諸ポリスの独立と自由を守るために、対マケドニア開戦、反マケドニア同盟の形成を訴えた。キケロは、元老院において、カエサル、そして彼に仕えた武将アントニウスによってローマの自由が危機に瀕していること、そしてアントニウスにはローマを統治する能力も正統性もないこと、ローマには今、協調が必要であることを訴えるために、デモステネスを意識した「フィリッポス王弾劾演説に倣って」（「フィリッピカ演説」）と呼ばれる演説を行なった。マッキントッシュは、『講和書簡 第一・第二信』を論じるために、古代はもちろんだが、近代においてもなお雄弁を代表する二つの演説を挙げているのである¹⁵。

自由の危機や内乱を背景とするキケロのコンテクストは、フランス革命戦争のコンテクストとは位相が大きく異なるものの、デモステネスのそれは、革命戦争と重なりうる。だが、マッキントッシュは、パークや読者に、このコンテクストの利用を勧めるために、デモステネスを挙げているわけではない。彼はデモステネスとキケロについてこれ以上、論じていないものの、その意図は、本書評の大きな枠組みが、『ヘンリー 5 世』からの引用が示唆するように、雄弁の功罪を説くことにある点を踏まえて解釈されるべきだろう。デモステネスの記述に続けて引用されているのが、ミルトンの一節であることは象徴的である。

〔古代の雄弁家はその〕抗されることのない雄弁によって

気性の荒い民主主義をその意のままに操り

兵器庫〔軍隊・Arsenal〕を震え上がらせ、その雄弁はギリシャの全土

遠くマケドニアとアルタクセルクセス〔ペルシア王〕の玉座に至るまで響き渡った

ミルトン『復樂園』第4巻 268-71 行

「抗されることのない」「その意のまま」「震え上がらせ」という句によって、繰り返し伝えられるのは、雄弁のもつ危険性である。それに加えて、マッキントッシュは明示していないが、『復樂園』(Paradise Regained, 1671 年)の題材やナラティブがもつ含意もまた重要なメッセージとして機能するだろう。その題材は、新約聖書にあるイエスがサタンから受けた荒野の誘惑であり、そのナラティブは、古代ギリシア由来の雄弁の才を用いて、言葉巧みに世界の制覇を教唆するサタンと、その誘惑に抗して「天なる光の泉から光を受け入れる者」としてのイエスからなる(杉本 1989)。イエスはサタンの誘惑に打ち勝つことで人類の救世主(キリスト)となった。すなわち、マッキントッシュは、パークに雄弁の才の使用をよく弁えるように論ずるとともに、読者には、サタンとイエスのナラティブを通して雄弁の危険性を思い起こさせ、雄弁に抗するよう訴えているのである。

書評はここで、パークの雄弁さを立証するための抜粋へと移るが、それについて論じる前に、本書評の結びに注目したい。

〔パークは〕自分自身の良心に従い、後世からの感謝と敬意の念を期待——この期待には十分な根拠がある——したことで、敵からは誹謗中傷を受け、友人は彼のもとを去り、祖国からはその恩を忘れられている。この偉大な人間の助言の行く末を考えるにあたって、キケロがライバルであるホルテンシウスの死を嘆く美しい一節を思い起こさずにはいられない。

愛国者が、おのれの権威ある演説によって、怒れる市民の手元からこれらの武器〔計画性、知性、権威を指す。前文において、キケロはこれらを親しみをもって学び、またかつては著名な政治家や、公正で秩序ある共同体がもつべきものだった、と触れている〕を引き離すことができてしまったのならどうなるだろうか。間違いなく、人々の愚かさや恐怖によって、平和の擁護者の行く手が阻まれることになるだろう（キケロ『ブルトゥス』1-7）(ibid., 451)。

マッキントッシュのメッセージは、この結末においてもっとも明瞭に語られている。パークの雄弁によって、市民は知的武装を解除され、自分で考えられない無防備な彼らを愚かさや恐怖が支配し、彼らが平和を妨げるようになる。すなわち、雄弁な『講和書簡 第一・第二信』は、市民から理性を奪い、彼らは感情に任せて和平交渉を妨げ、戦争へと突き進むというのである。本書評の冒頭と結びに置かれた、雄弁の危険性についてのメッセージこそ、本書評の主題と言えるだろう。

以上、本項で示してきたように、マッキントッシュは、雄弁の才を称える一方で、雄弁によって聴き手、読み手の意思が操作されることに懸念を示している。古代ギリシアにおいて、ゴルギアスが雄弁の魅力を呪法と魔法に喩えて称えたのに対して、プラトンは、ゴルギアスの言う雄弁に正義と不正義の概念が欠落していることを批判して応答した。マッキントッシュは、このような雄弁にかかわるコンテキストとその伝統を利用して、パークを批判することができたのである。

3.2. 雄弁さの立証

前項で論じたように、マッキントッシュは、まずもって雄弁の危険性について論じた。本項は、マッキントッシュの議論の展開に従い、彼がパークの雄弁さをどのように立証しているかを検討する。マッキントッシュは『講和書簡 第一・第二信』から、幾つかの文章を抜粋——その多くは、原文で数ページに及ぶほどの長文である¹⁶——し、その立証に努める。たしかに、彼は、抜粋を「とりとめのない賞賛というお世辞の文体ではなく、それにふさわしい賛美である」(Mackintosh 1796: 312) ことを示すためと言う。だが、前節での検討を踏まえれば、この説明を額面通り受けとることはできない。本節の検討によって、この立証は、パークをただ単に称えるものではなく、修辞学的な読解を通して、どこが優れているかを明らかにすることによって、著者と読者のあいだに適切な距離をとらせ、読者が気づかないうちに、パークによって意のままに操られることを防ぐ、すなわち、パークがかけた（あるいはかけようとする）魔

法を解くための分析であることが明らかとなるだろう。

マッキントッシュは、『講和書簡 第一・第二信』を、政治パンフレットではなく、文芸作品として読解するときに、バークが「最良の時期に書いたもっとも幸福な著作のいずれにも優っているとは言いがたい」(ibid., 311) と否定的な見解を述べてはいる。だが、次の引用が示す通り、マッキントッシュは本作品の修辞学的魅力を語り、その比類のなさを称えている。

この著作で際立っているのは、自然と科学のあらゆる領域から引き出された、広大な視野と理解力であり、無限の引喩 (allusion)、図解、装飾、言語に対する比類なき支配力である。そして、崇高で恐るべき才能から陽気で遊び心のある空想へと自在に変化する想像力の多様性、感性の美しい発露によって政治的論争の激しさを和らげ、道徳と市民の知恵についての重厚で気高い格言による配合を威厳に満ちたものにする、巧みな力もまた際立っている。〔略〕要するに、世にも名高いウィット、ユーモア、パトス (pathos)、発想法 (invention)、力、威厳、豊かさ、そして壮大さの点で秀でている。〔略〕彼が扱えばどんな話題であってもありふれたものにはならない (ibid.)。

彼にとってバークの雄弁は、学問と想像力を駆使して言語を縦横無尽に操ることで、読み手の感情を意のままに操る、類い稀な才能なのである。この才能は、文芸に留まらず、政治においても有効である。政治的論争を穏和にし、道徳と知恵に関する格言を威厳のあるものへと高めるからである。この引用部分において注目すべきは——同時代人にとっては共有された知だったと思われるが——、引喩、装飾、パトス、発想法といった修辞学の術語を交えて、バークの雄弁が解説されている点である。アリストテレスによって体系化され、キケロ、クインティリアヌスによって発展した修辞学は、19世紀から現在に至るまで修辞学のうち文彩 (figures) のみ継承されているだけだが、主題の選択を含む、説得立証法 (ピステイス)、修辞 (表現) 法 (レクシス)、配列法 (タクシス) からなる、説得の技法体系だった¹⁷。マッキントッシュの分析は、バークのテキストが修辞学を駆使して成立していることを説得的に示し、その魅力の謎解きをしていると読むことができる。

この段落においてバークへの批判的言及はほとんどないが、その例外は、先の引用箇所が続く、「バーク氏は言語に対する支配力を喜んで大胆に使ってきたが、しばしばそれを乱用してきた」(ibid.) という非常に短い一節である。そのうえで、『講和書簡』そのものへの言及を避けながらも、ここでも、雄弁の才を慎重に用いることが説かれているのである。

マッキントッシュはバークの雄弁の才を立証するために、幾つかの文章を抜粋している。その最初の引用は、フランスの惨状をイングランドに写し取った文章である¹⁸。

この国〔イングランド〕の慈悲深い君主が冒とく的に殺されたとしよう。この国の寮母の地位にある模範的な女王も、同様に殺害された。その美しさと慎ましやかな優雅さはこの国の飾りであり、また、同性の無邪気な若者の指導者であり模範である王女らは、何百も

他の人々や、母と娘、そして第一身分に属する淑女とともに、残酷で不名誉な死に処された。〔略〕もし我々が、我々全員にとって名誉である大義のために我々が同胞〔パークが敬意を払っているフランスの諸勢力〕を守るのではなく、フランスの合法的な政府と合法的な集団を見捨てて、文明社会と人類を貶めるこの嫌悪すべき篡奪者と一緒になって、恥ずべき破壊的な友愛を追い求めるのであれば、これらの例示が本当のことになる（『講和書簡 第一信』, *W&S, IX*, 253-257=920-922）。

執拗に続く陰惨な描写は、単なる想像上の情景描写ではない。フランスの惨状をイングランド人が理解できるようにするための説得の技法の一つである¹⁹。マッキントッシュは、この描写を「哲学的演説」と呼び、「共感」(sympathy)を鍵概念としながら、パークの意図を読みとろうとする。「言葉で正確に描写する者は、他人の不幸への共感によって我々を鼓舞させるために、想像の世界のなかで、あたかも自分たちに振りかかったものであるかのように表現する」(Mackintosh 1796: 315)。人間は、その利己心の制約によって、自分とは関わりのない状況やそこに置かれた人々を正確に理解することができない。マッキントッシュは、この抜粋箇所を次のように分析し、他人への無関心を克服する一つ的手段として、雄弁家の優れた筆力を評価している。

我々が他人への共感を教えられるのは、自分自身が彼らの状況に置かれたと仮定する場合だけである。我々が自分たちの行動を本当に判断できるようになるのは、我々の境遇に置かれ、我々の行動を採用する黄土人を仮定した場合だけである。隣人への無関心は、我々人間の根源的で利己的な性質であり、あまりにもよく見られるものであるが、上述のように仮定することは、この無関心を克服する唯一の手段であり、また、自分たちの欠点を公言し、非難することへの嫌悪感——これは人間の傲慢で頑固な心に染みついている——に打ち勝つ唯一の手段である (ibid.)。

共感を鍵概念に道徳哲学を体系化したのは、アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) である。スコットランド啓蒙を知的背景にもつマッキントッシュが、パークの一節を共感概念によって読解することは自然なことだっただろう。彼の理解では、無関心を関心事項へと変えられるかどうか、哲学的雄弁家と芸術家の相違であり、また雄弁家と熱弁家 (declaimer) との違いなのであった。

マッキントッシュが抜粋する次の一節は、イングランドとフランスにおける富の位置づけの相違を描写したものである²⁰。この危機的状況にあっても、イングランドの富と国力はかつてないほどに増大しているとの認識を踏まえ、その理由を富が徳と名誉の奴隷である点に求めている。

富が、徳と公的な名誉の従順でよく働く奴隷であるならば、富はそれ本来の姿を保ち、本

来の力を発揮する。だが、もしこの順序が変わり、名誉が豊かさを保つために犠牲にされるのであれば、豊かさには目も手もなく、真の生命力のあるものを何ももたないのだから、その生き活きとした力、正統な主、強力な保護者という状態を長く維持することはできない。もし富が我々に指図するようなことがあれば、我々は本当に貧しくなるだろう（『講和書簡 第一信』 *W&S, IX, 194=858*）。

ローマ共和政末期に活躍した歴史家サルスティウス著『カティリーナの陰謀』の一節を思わせるこの記述によって²¹、パークは言外にフランスは富が徳と名誉を支配していると印象づけるのである。マッキントッシュはこの一節を「力量の多様性と多才さ」を表すものとして紹介し、「冷静かつ正確で威厳のある哲学の一例」（*Mackintosh 1796: 315-316*）と評価している。そのうえ彼は、このパークの記述を留保なく踏まえ、このような富の増大そのものを目指す、打算的な政治家を「計算に没頭している人たち」（*ibid., 316*）と呼び、批判した。

次いで引用されるのは、フランス政府を支配する党派を「机の手先、偏愛の手先」と揶揄する一節である²²。パークは、彼らは「政治公約の原理がお気に召さない」と評し、「彼らの手にかかった統治ほど卑劣で機械的な商売はない」と蔑んでいる。マッキントッシュは、その風刺の才を評価するとともに、残念ながらこの風刺が正確な事実であることを嘆く（*ibid.*）。重要なことは、パークがフランス政府を風刺するために用意した一節が、マッキントッシュの手によって、イングランドを含む政治家一般の風刺へと転用されている点である。彼は、パークの政治生活は、徳を習慣としない低俗な政治家（*politician*）との対決の連続だったという。一見、太鼓持ちのようなこの一節は、パークを批判する武器と化す。

パーク氏は、このような低俗な政治家たちが、自らの計画〔和平交渉の破綻と戦争の継続、対仏同盟の形成を指す〕を実行に移す唯一の道具であることを忘れてしまったのだろうか。これらの「机の手先と偏愛の手先」は、不運なことに、ヨーロッパを統治している。こうした心が狭く利己的な人間が、——（パーク氏自身の表現によると）この〔戦争の〕成否は彼らが公平無私であることにかかっている——計画を実現するための使用可能な唯一の手段なのである。この計画を実行に移すことができる者は他にいなかった。〔その結果、〕寛大さという目的は、利己心という代理人を介すことでのみ達成されることになり、将来の知恵という目標は近視眼的な努力によってのみ実現されることになった。手段と目的がこれほど致命的に異なる計画は他になかった（*ibid., 317*）。

マッキントッシュは、政治家はみな低俗で利己的であるという一般命題を立て、パークの対仏同盟が机上の空論であると詰るのである。この主張は、マッキントッシュのもっとも決定的な講和批判として、本書評の最終パートでさらに詳細に論じられている²³。

パークの雄弁さを立証するための最後の抜粋は、国王殺し政府に嘆願するヨーロッパ各国の国王という想像上の描写である。

人間の偉大さの衰退を想像することが好きではない人にとっては、ヨーロッパの王冠を戴いた威厳ある君主たちが、まるで忍耐強い嘆願者として国王殺し政府の控えの間に集まりただじっと待っていることほど、屈辱を感じる光景はないだろう（『講和書簡 第一信』W&S, IX, 206=870-871）。

この一節に対するマッキントッシュの考察はほとんどなく、ユウェナリス『風刺詩集』（*Satvrae*, 2世紀初頭）とサミュエル・ジョンソン「スウェーデン王カール12世」（『人間の願望の虚しさ』（*Vanity of Human Wishes* 所収, 1749年）に類似の描写があることを指摘するに留まっている。

以上、本節は、マッキントッシュによるバークの雄弁に関する評価を考察してきた。彼の雄弁さを批判したり、そもそも雄弁には目も向けず、バークが設定した主題のみを論じ、批判するのであれば不要な議論も多い。だが、バークの雄弁の才を認めざるをえなかった彼は、雄弁の立証を逆手にとり、類い稀な雄弁ゆえに一層危険だと、コンテキストをずらした批判を展開したのである。

4. マッキントッシュの応答 2: 世論

本節で論じられるのは、雄弁と世論の関係である。18世紀に入り、世論は政治社会を論じるうえで不可欠の概念となった。ヒュームは「統治の基礎となるものはただ世論だけである」（Hume 1985: 32=25）と述べ、バーク自身も、以下で見るように、「世論は人間が行動する際の舵（rudder）」（Burke 1796: 65）と解した。雄弁と世論は決して相反するものではないが、雄弁によって世論が操作されるとき、あるいは世論が雄弁に従わないとき、両者の緊張関係は高まる。本稿にとって興味深いのは、マッキントッシュが、バークが、革命を支持するなどの自らの見解と異なる世論に苛立っていることは事実であるとしても、世論批判を言明していない箇所においても、世論に敵対するバーク像を引き出そうとしている点である。

本節はマッキントッシュのバーク批判が世論への言及にあることを手がかりに、彼がなぜ、そしてどのようにバーク批判を展開したのかを明らかにする。マッキントッシュが、雄弁対世論の対立図式を用意し、『講和書簡 第一・第二信』をこの枠組みのなかで読解していたことが明らかとなる。

4.1. 法の支配

前項で検討したバークの雄弁の才の立証に続いて論じられるのは、法の支配についての考察である。マッキントッシュは、ここにおいてもフランス革命戦争と直接関わらず、どちらかと言えば目立たない記述を抜粋し、法の支配から逃れようとするバーク像を描く。その抜粋箇所は、バークが、十数年にわたって批判し、ウェストミンスター議会で弾劾裁判にかけた、東インド会社総督ヘイスティングズ（Warren Hastings, 1732-1818）が、貴族院において無罪判決を受けたことを批判する一節である（ただし、バーク、マッキントッシュともに、ヘイスティ

ングズの実名を挙げてはいない）。マッキントッシュは、パークはこの無罪判決をヘイスティングズ派が形成した世論に帰した、と言う。マッキントッシュが取り上げる『講和書簡』の一節は次のものである。

我が政府はその司法機関のもっとも有能な機関〔貴族院〕から否認された²⁴。〔略〕最高法廷には、〔下位の諸法廷を〕強制したり規制したり、必要な場合には、他のすべての裁判所が必要としているものを補うことができる、威厳と機能がある。だが、そのすべてが奪われた（この原因の究明は、ここでは目的としていない）。公訴は、国家への反逆を教え、刑事犯を言い逃れの技巧に習熟させ、国家に対して陰謀を企てても完全な無罪を獲得する方法を教え、暗殺者がどこまで安全にその莊嚴な首長を狙えるかを示す学校と化した（『講和書簡 第一信』 *W&S, IX, 197=862*）。

抜粋箇所が示しているのは、この引用部分に象徴されるように、フランス革命戦争という危機的な状況において、法が効力をもたず、統治機構が機能していない、というパークの認識である。パークはヘイスティングズ弾劾裁判に限らず、近年、大規模な公訴において国王側が敗北している事実を示し、その原因を問うてはいる。だが、曖昧に語られたその解答は、せいぜい「国内の陰謀家」でしかない。少なくともこの文脈において、パークがその責を世論に帰してはいない。同時代人であるマッキントッシュが、他のコンテキストをあわせて、ヘイスティングズ問題にかかわるパークの言動を世論批判として読解した可能性はある。いずれにせよ、先の抜粋箇所へのマッキントッシュの応答は、無罪判決後もヘイスティングズを非難し続けるパークに向けられ、法の支配という一般原則の重要性が説かれる。パークの言明は法の支配を脅かすのである。

神は、我々が罪を罰することに熱中しているうちに、無実という安全装置や城壁を破壊することを禁じておられる。我々の先祖は、抑圧という怒りを牽制し、専制権力による惨めな氾濫から我々を救うために、土塁と防波堤を築いた。そのおかげで、我々も我々の子孫も、盲目的な怒りという一瞬によって、土壌が完全に破壊されるという狂気から無縁でいられる（*Mackintosh 1796: 320*）。

彼の理解において、弾劾裁判判決の不当性の訴えは、司法制度という土塁と防波堤を壊そうとする暴挙である。重要なことは「この国の法律によって無罪となったという事実」（*ibid.*, 321）のみである。自らにとって不服な判決を根拠に統治機構の不全を導く出すパークは、法の支配を超えようとする存在である。マッキントッシュは自らの考えとパークの考えを次のような対照関係で捉える。

我々はこの判決を、反感と恐怖心に対する義務感の勝利だと見做す。彼〔パーク〕は義務

に対する不満と臆病の勝利だと考える。我々は、公的な偏見によって支持された力に対して、法の優位を示すものだと考える。彼は、新しいセクトが世論を用いてすべての法律と合法的な権力に対して勝利したと見做す (ibid., 322)。

先に触れたように、マッキントッシュが、バークの見解を「世論を用いた新しいセクトの勝利」と解する根拠は必ずしもはっきりしない。この論点における、マッキントッシュの世論への言及がここだけであることも、さらなる考察を困難にしている。12月掲載分の書評の前半部には、世論についてのまとまった記述があるため、世論については、項をあらためて検討することとしたい。本稿でこれまで論じてきたように、本書評はバークの雄弁の才への賞賛という形態を採って展開されており、これまでのところ、バークへの表立った批判はほとんどなかった。したがって、法の支配をめぐる箇所、マッキントッシュははじめてバーク批判を全面的におこなったことになる。彼は先の分析に続けて「芽生えつつあるこれらの願望〔ヘイスティングズへのバークの恨みを晴らすために、法の足枷を外そうという願望〕は、暴政の萌芽であり、将来の迫害の胎児である」(ibid.)と論じ、バークの言動を「暴政の萌芽」と呼ぶところまで進む。法を超えようとする力は、それが立憲的な権力ではなく雄弁の才にもとづく力であっても、恣意的な力であり、暴政を導くと解されたのである。

4.2. 世論

本項で検討される、世論を論点とするバーク批評は、正規版では削除され、オーウェン版にのみ残る抜粋箇所を組上に展開されている²⁵。マッキントッシュは、バークの一節を引用した直後に「これまで人間が論じてきた問題のなかで、世論に対する世俗統治の権限の範囲と限界ほど重要な問題はない」(Mackintosh 1796: 432)と述べ、また考察を展開するなかで「現在、ヨーロッパを混乱させている世論の衝突によって、自分たちの心のなかに生じた不寛容への傾向が高まっている」(ibid., 435)と論じ、世論を主題化することの重要性を説く。二人は何をめぐって対立しているのだろうか。次の一節で明らかとなるように、バークは、世論はフランス革命戦争に反対していると認識していた。第二節で見たように、オーウェン版が書かれた1796年3月時点においては、議会も世論も和平交渉に前向きだった²⁶。戦争継続を求めるバークは、このような世論を変える必要があったはずである。

もっとも許容度が高いと主張する人ほど、刑事手続きや、ありとあらゆる強制的な手段を用いて、自分と反する意見の書かれた出版物を激しく問い詰める人はいない。これはあまりに不合理ではあるけれども、驚くには値らない。もしこうした矛盾がなければ、世論に反する戦争も、他のすべての事例と同じく、多かれ少なかれ、事例の理由に応じて正当化されうる (Burke 1796: 64)。

反語法で述べられるこの一節は、強制的な手段で自分とは異なる意見や世論を問い詰めなけれ

ば、世論に反する戦争であっても正当化への道を開くことができると言い換えられる。パークは「多かれ少なかれ、力の行使なしに世論に大きな変化が起こったことはほとんどない」、「世論を迫害することによってその信奉者の数が増減するとは一概には言えない」（ibid.）と続け、その具体的手段については沈黙しているものの、世論への介入を強く示唆する。

世論は、我々——人間としての我々もそうだし、国家としての我々もそう——にとって重要ではない、という格言は誤りである。世論は人間が行動する際の舵である。世論が賢明か愚かか、不道徳か道徳的かのいずれかであるように、行動の原因は有害か好ましいかのどちらかである。世論を規制することは、純理論的で教義的な哲学のもっとも大きな第一目的でさえあった。政治哲学の偉大な目標は、発見されたものを促進すること、害を与えるものを駆除すること、共同体に住む人間を、直接的に、悪い市民や問題を引き起こす隣人にしてしまうものを駆除することである。世論には無限の帰結がある。世論はマナーズを作り、実際に法を作る。世論は立法者を作る。したがって、世論は、先見の明のある政府がその出発点においてもっとも参照すべきものである。時が経てば、世論が無駄に終わったように見えることもある。それだから、戦争とは世論についての戦争のことだと聞かされた場合、世論についての戦争はすべての戦争でもっとも重要だと聞かされたことになる（ibid.）。

このパークの世論についての説明は謎めいている。たしかにパークは世論が統治の基礎であると明言している。一方で世論を統制すべきだという主張も明確にある。パークが世論を「統治の基礎」と言いながらも神聖視していないことは確かで、彼にとって「民の声は神の声」ではない。「愚か」で「反道徳的」な世論は、政治哲学によって規制され、駆除されなければならない。政府は世論を参照（look）すべきではあるが、それに従うべきであるという言明はどこにもない。また彼は、この引用箇所最後の文章において、世論の対立を戦争に見立て、それを「すべての戦争でもっとも重要」だと述べ、世論を制することが戦争を制することにつながる、とさえ仄めかしている。このような世論への敵対宣言とも読める大胆な一節をマッキントッシュはどのように解したのだろうか。

マッキントッシュはこの抜粋箇所への批判を「世論に対する世俗統治の権限の範囲と限界ほど重要な問題はない」（Mackintosh 1796: 432）との一節から始める。彼は、パークが言うように、「あまりにも法外で極悪非道で悪質な世論」であれば「社会の静けさを守るよう、治安判事に依頼することも否定できない」と述べ、パークの主張の一部を認めている。また、ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）の『寛容についての手紙』（*Letter on Toleration*, 1689年）から「人間社会に反する世論や、政治社会の維持に不可欠な道徳的な諸規則に反する世論を、為政者が許すことはない」という一節を引用して、この主張を裏付けようとしているかにみえる。だが、マッキントッシュの本意は、このロックの引用に挟まれた「やや曖昧で不注意な言語」、「あらゆる迫害の口実を与えるのに十分な大きさで表現された例外」というロック評にある。

すなわち、世論への介入は例外であり、厳格かつ明晰な理由を要するものである。こうした彼の考えは次の引用箇所にはっきりと示されている。

世論の区別なく容認し、世論を公平に保護することが、為政者の行為の一般規則であるべきである。一時的な介入は、非常に危機的な状況下において、為政者に託された大きな利害にとって有害で危険になりうる世論を牽制するための、めったにない例外に過ぎず、嫉妬深く、監視されるべきである (ibid., 434)。

為政者の世論に対する一般原則は、どのような世論であっても公平に容認し、保護することにある。マッキントッシュは、世論を論点とする考察のなかで、先の抜粋箇所からパークの主張を取り出し、逐一反論するという形式を採用してはいない。むしろ、フランス革命戦争という状況下における為政者と世論の関係という命題のなかで考察している。そしてこの考察部分において、フランス革命戦争が「例外状態」であり、世論への介入が許されるとする記述や仄めかしは、どこにもない。むしろ、「自分たちの臣民の行為だけでなく、世論も統制したいという、この新しい野心の原理、欲望を、為政者の胸に植えつけることから生じる悪事の恐ろしさはいかほどだろうか」(ibid., 433) という一節に代表されるように、世論への介入から生じる専制政治への危機感が表明されている。

また、マッキントッシュは、戦争と平和をめぐる世論の対立が、双方の不寛容を生み出していると認識していた。「不寛容に対する恐怖心は徐々に弱まっていき、我々は、長い間、世界の伝染病であり恥辱であった、あの忌まわしい実践へと逆戻り」(ibid., 434) することへの危機感ももっていた。この不寛容さを代表する論者こそ、自分とは異なる世論への介入や迫害を明言するパークだったのである。先のパークの主張と重ねあわせて見たとき、両者の見解の対立は決定的である。

以上、本節は、パークとマッキントッシュが激しく衝突した舞台が世論解釈にあることを明らかにしてきた。マッキントッシュ自身が、雄弁対世論という対立図式を明示しているわけではない。だが、マッキントッシュが、パーク批判として挙げる箇所は、『講和書簡 第一・第二信』の主題から大きく外れた細部の記述であったり、正規版から削除された一節であること、そしてその内容がパークが雄弁によって世論を牽制したり、世論への規制や迫害を肯定する記述であったことを考慮すれば、彼の念頭には、こうした対立図式が本パンフレットの枠組みとして置かれていたと考えられるのである。

5. 結び

本稿は、マッキントッシュが雄弁を主題にして『講和書簡』を評していることを示した。本稿は、マッキントッシュの国家間関係に関する論点を扱ってはいないが、マッキントッシュにとって、国家間関係というパーク自身が設定した主題に劣らず、雄弁について論じることが、

この政治パンフレットを批評するうえでも、反バーク、反戦争の観点からも重要なのであった。

バークはマッキントッシュのような応答を期待も予期もしていなかったに違いない。戦略的な読み手は、書き手の戦略や意図を故意にずらし、異なる論点を提起し、書き手を批判しうる。マッキントッシュは、ヨーロッパ政治（学）を強く規定しているソフィスト的なコンテクストを用いて、また、世論という新しいコンテクストに雄弁を包摂するという戦略を取り、さらにそれらを専制政治という伝統的なコンテクストに接続することによって、バークの雄弁の才を封じ、反戦争、和平推進を訴えたのである²⁷。

注

¹ 正式な題名は *Two Letters addressed to a Member of the present Parliament, on the Proposals for Peace with the Regicide Directory of France* (『現職の一国会議員に宛てた、フランスの国王殺し政府との講和案についての二つの書簡』) である。

パークの生前から編纂されていた著作集 *The Works of the Right Honourable Edmund Burke* (1792-1827) のなかに、当初、執筆していた 'Letter to Lord Fitzwilliam' は第四信、遺作となる書簡は第三信として、一連の講和書簡に組み入れられた。現在もこの編集方針が踏襲され、一連の講和書簡は最新の著作集 *The Writings and Speeches of Edmund Burke* (以後、W&S), IX に収録されている (W&S, IX, 44)。『講和書簡 第一信』については、中野好之編訳『パーク政治経済論集: 保守主義の精神』、法政大学出版局、2002 年に邦訳がある。訳は適宜改めた。

² この問題は Armitage (2013) によって大胆かつ明瞭に提起された。

³ Wight に端を発する議論の系譜やそれに関わる論争については、荻谷 (2018) を参照。

⁴ 近代ヨーロッパの思想史、言説史を「文明の作法」の枠組みで解する木村 (2010) には、この分析視角が活かされている。

⁵ 今日、用いられる外交という語彙を担っていたのは、negotiation (交渉) もしくは federation (連合) であり、diplomacy は新語だった。ただし、diplomatic という形容詞は『講和書簡』出版よりも早期に各種、定期刊行物で確認でき、パークの造語とまで言うことは困難である。

⁶ 両者は、保守派 (反革命派) と急進派 (革命派) という二色の色分け図により、その差異が強調されてきた。だが、真嶋 (1998) が明らかにしたように、両者共に、革命ではなく改革を志向している点や民主主義に対する警戒心をもつなど、差異と同時に類似点も見逃されるべきではない。スコットランド啓蒙のコンテクストでマッキントッシュを解釈する研究に Plassart (2015) がある。

⁷ Finlay は『オクスフォード国民伝記事典』(*Dictionary of National Biography*) において、本書評を「好意的な書評」(Finlay 2010) とのみ紹介している。たしかに本書評にはパークを高く評価する記述が散見するが、本稿は、この好意は条件付きのものであり、敬意を払ってはいるものの厳しい批評となっていることを強調する。

⁸ 残る国家間関係についての議論は、別稿にて論じる予定である。

⁹ オークランドはもともと反和平派であり、戦局に応じて主張を転向した (Bourke 2015: 900)。

¹⁰ ただし、ジョージ 3 世は和平案に懐疑的だった (Bourke 2015: 902)。

¹¹ この事情により、『講和書簡 第一・二信』は、正規版と海賊版 (オーウェン版) の二種類の版が存在している。正規版には 1796 年 3 月以後の情勢が書き加えられている。出版までに戦局は動いている。1796 年 3 月 2 日にナポレオン・ボナパルトがイタリア方面軍総司令官に就任し、イタリア戦役で大きな成果を挙げていた。原稿はすでに出版社に回っている時期だと思われるが、10 月、フランスと同盟を結んだスペインがブリテンに宣戦布告、その結果、地中海を失ったブリテンは、10 月 14 日にフランスと和平交渉に入る。同年 12 月 19 日、ブリテンはフランスのベルギー併合を承認せず、交渉は決裂した (山崎 2018: 262)。オーウェン版は 3 月時点でのパークの状況認識を示している (Lock 2006: 535-536)。

¹² マッキントッシュ以外に、John Thelwall, Ralph Broome など 7 つのパンフレットが出版された他 (Lock 2006: 558-560, McDowell 1991: 22-25)、James Sayers による風刺画 ('Thought on a Regicide Peace') も著名である。

¹³ この書簡はパーク宅を訪れることを願うものであり、マッキントッシュはクリスマス後にパーク宅を訪ね、面会を果たした。彼はこの書簡のなかで「あなたの著作について考えを巡らすことは、ずっと昔から、私の主要な学びであり、喜びでした。その著作に含まれている教えは、青春時代の新鮮で生き活きとし

た感情の想い出——この想い出は、あまりに純粋で極上の喜びなので、人間の心がもう一度味わおうとしてもできないほどです——と絡み合って、私の心のなかで愛されています」、「私は思い切ってあなたの意見に反対いたしました、あなたの人柄をあがめていることに変わりありません」と書いて、パークへの賛辞を送った。

¹⁴ 短い言及ではあるが、Lock もこの文脈においてデモステネスとキケロが挙げられていることに留意している（Lock 2006: 560）。

¹⁵ ヨーロッパの政治文化を考えるうえで、雄弁家や雄弁に対する賞賛は避けて通れない。同時代において、デモステネスやキケロと比較されたパークのコンテクストを復元するためには、雄弁の政治学が必要となる。古代のレトリック、雄弁についてのヨーロッパ受容史については Conley (1990) を参照。また、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、ブリティッシュ・キケロ (British Cicero) という語彙が頻出し、パークを含む政治家の評価軸となっていた。19 世紀初頭には *British Cicero* (Thomas Browne 編、1808 年) を書名に掲げる演説集が出版された。

同時代である思想家ヒューム (David Hume, 1711-1776) は、雄弁を主題とするエッセイを書き (1758 年)、近代は古代と違い、詩人と哲学者は賞讃するが、雄弁家を賞讃する文化はなく、拔きでた雄弁家はいないと考えた。ブリテンの雄弁は「冷静で優雅で、繊細で、情念に動かされるよりも、理性を重んじ、議論や普通の話法以上にけっして調子をあげない雄弁」(Hume 1985, 108=93) と評した。

¹⁶ 本稿は、マッキントッシュの立証を示すために、これらの抜粋のうち、マッキントッシュが挙げる重要な特徴をもつ箇所のみを引用することにする。

¹⁷ 日本語で読める優れた概説書に佐藤 (1992)、浅野 (2018) がある。

¹⁸ 『講和書簡 第一信』, W&S, IX: 253-257=920-922 頁に該当する。

¹⁹ 東インド会社のインド統治批判をライフワークとしてきたパークは、インドの惨状をイングランド人に理解させるために、イングランドやヨーロッパと、インドを比較、類推する演説を数多く公表してきた。

²⁰ 『講和書簡 第二信』, W&S, IX: 194-195=858-859 頁に該当する。

²¹ 「富が名誉となり始め、栄光、支配権、権力もこれにつき従うようになると、徳は色あせ、貧しさは恥辱と考えられ、潔白さは悪意とみなされ始めた」(Sallust 2007: 10=198)。

²² 『講和書簡 第二信』, W&S, IX: 216 に該当する。『講和書簡 第二信』からの引用、参照は、本書評中、この箇所と国家間関係に関わる箇所 (W&S, IX: 265-270) の 2 つだけである。

²³ Mackintosh (1796: 446-449)。パーク自身、対仏同盟の失敗が各国の利己的行動にあり、同盟が名ばかりであることを認めていた (『講和書簡 第二信』 W&S, IX: 269)。マッキントッシュはこの一節を引用して批判を展開する。

²⁴ 1795 年 4 月 23 日、貴族院がヘイスティングズに無罪判決を言い渡し、弾劾裁判が結審したことを指す (W&S, IX: 198n)。

²⁵ この削除箇所は、本文で先に検討した、フランスの惨劇をイングランドに写し取った叙述に続く部分に挿入されている (『講和書簡 第一・第二信』, W&S, IX: 257=923)。

²⁶ パークがなぜ『講和書簡 第一・第二信』(正規版) から世論に関する記述を削除したのか確定的な根拠はないが、戦況に応じた世論の変化はその一つの仮説として成り立つ。

²⁷ フランス革命戦争をめぐる見解の相違を抱えていたとはいえ、マッキントッシュはパークに敬意を表し続けた。パークの死後、マッキントッシュは『自然法と諸国民の法についての論考』(*Discourse on the Law of Nature and Nations*, 1799) の末尾で、パークをキケロと並び称している (刈谷 2019: 156-157)。

引用文献

- Armitage, David (2013) *Foundations of Modern International Thought*, Cambridge: Cambridge University Press, (平田雅博・山田園子・細川道久・岡本慎平訳, 『思想のグローバル・ヒストリー: ホッブズから独立宣言まで』, 法政大学出版局, 2015 年).
- Auckland, William Eden (1795) *Some Remarks on the Apparent Circumstances of the War in the Fourth Week of October 1795*, London: Printed for J. Walter.
- Bourke, Richard (2015) *Empire and Revolution: The Political Life of Edmund Burke*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Burke, Edmund (1796) *Thoughts on the Prospect of a Regicide Peace*, London: printed for J. Owen.
- Burke, Edmund (1970) *The Correspondence of Edmund Burke, Volume IX: Part I: May 1796-July 1797; Part 2: Additional and undated letters*, R. B. McDowell ed., Chicago: Chicago University Press.
- Burke, Edmund (1991) *The Writings and Speeches of Edmund Burke Volume IX: Part I. The Revolutionary War, 1794-1797; Part II. Ireland*, R. B. McDowell ed., Oxford: Oxford University Press.
- Conley, Thomas M. (1990) *Rhetoric in the European Tradition*, New York: Longman.
- Finlay, Christopher J. (2010) "Mackintosh, Sir James, of Kyllachy," in *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford: Oxford University Press.
- Hume, David (1985) *Essays, Moral, Political, and Literary*, Indianapolis: Liberty Fund, Revised edition, (田中敏弘訳, 『ヒューム: 道徳・政治・文学論集 [完訳版]』, 名古屋大学出版会, 2011 年).
- Jones, Emily (2017) *Edmund Burke and the Invention of Modern Conservatism 1830-1914: An Intellectual History*, Oxford: Oxford University Press.
- Lock, F. P. (2006) *Edmund Burke, vol.2: 1785-1797*, Oxford: Oxford University Press.
- Mackintosh, James (1796) "Review *Two Letters addressed to a Member of the present Parliament, on the Proposals for Peace with the Regicide Directory of France* (by Edmund Burke)," *Monthly Review*, Vol. 21, pp. 306-324; 430-451.
- McDowell, R. B. (1991) "Introduction," in Edmund Burke, *The Writings and Speeches of Edmund Burke Volume IX: Part I. The Revolutionary War, 1794-1797; Part II. Ireland*, Oxford: Oxford University Press.
- Nicolson, Harold (1988) *Diplomacy*, Washington, D.C.: Institute for the Study of Diplomacy, School of Foreign Service, Georgetown University, Institute for the study of diplomacy edition, (斎藤眞・深谷満雄訳, 『外交』, 東京大学出版会, 1968 年).
- Plassart, Anna (2015) *The Scottish Enlightenment and the French Revolution*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sallust (2007) *Catiline's War, The Jugurthine War, Histories*, transl. by A. J. Woodman, London: Penguin, (栗田伸子訳, 『ユグルタ戦争・カティリーナの陰謀』, 岩波書店, 2019 年).
- Stanlis, Peter J (1953) "Edmund Burke and the Law of Nations," *The American Journal of International Law*, Vol. 47, No. 3, pp. 397-413.
- Wight, Martin (1966) "Western Values in International Relations," in Herbert Butterfield, and Martin Wight eds. *Diplomatic Investigations*, London: Allen & Unwin, Chap. 5, pp. 89-131. (池田丈祐訳「国際関係における西洋的価値」, 佐藤誠ら訳『国際関係理論の探求: 英国学派のパラダイム』日本経済評論社, pp. 91-145 頁, 2010)

- 浅野橋英（2018）『論証のレトリック：古代ギリシアの言論の技術』，筑摩書房．
- 犬塚元（2017）「受容史・解釈史のなかのバーク」，中澤信彦・桑島秀樹（編）『バーク読本：＜保守主義の父＞再考のために』，昭和堂，第1章，20-41頁．
- 荻谷千尋（2018）「国際社会論におけるバーク：“ティーカップ”の中の「論争」？」，『公開シンポジウム「国際学の先端」：（準）周辺からみた国際社会報告書（桜美林大学国際学研究所）』，41-62頁．
- （2019）「フランス革命期ブリテンにおける諸国民の法の理解：エドモンド・バークとジェームズ・マッキントッシュを中心に」，『関西大学法学研究所研究叢書』，第60号，135-164頁．
- 木村俊道（2010）『文明の作法：初期近代イングランドにおける政治と社交』，ミネルヴァ書房．
- 佐藤信夫（1992）『レトリック感覚』，講談社．
- 杉本誠（1989）「『復樂園』と聖書」，『城西大学女子短期大学部紀要』，第6巻，第1号，73-86頁．
- 真嶋正己（1998）「急進主義者によるバーク批判 II: J. マッキントッシュの『フランス擁護』を中心に」，『広島女子商短期大学紀要』，49-61頁．
- 山崎耕一（2018）『フランス革命：「共和国」の誕生』，刀水書房．